

## 彙報

### 平成一五年度秋期東洋学講座講演要旨

(現地史料からみるイスラーム世界)

第四七六回 一〇月一四日(火)

### アラブ——都市に生きる人々——

東京大学名誉教授  
早稲田大学教授  
東洋文庫研究部長

佐藤 次高

東洋文庫のアラビア語図書の収集は、一九六五年頃から本格的に開始された。まず基本的な図書の収集が第一とされたので、当時活発な取引を行っていたバグダードのムサナー書店を介して刊行史料の収集が実施された。この収集を担当した研究員の多くが歴史の専門であったことから、収集は一九世紀以前の歴史・宗教関係の刊行図書を中心にして行われた。その結果、現在のところ、東洋文庫のアラビア語史料は、前近代の中東・イスラーム世界にかなする限り、日本でもっとも充実した蔵書を誇るにいたっている。その数は、二〇〇三年一二月現在で、アラビア語図書一〇

三八八点、ペルシア語六五八四点、トルコ語九三七七点、およびオスマン・トルコ語一三九二点である。冊数はこの一・五〜二倍になるであろうか。

写本と文書の現物は、コーラン一点(一四世紀末の筆写)とペラム文書八点だけである。ペラム文書はモロッコのファースにおける不動産売買文書であり、時代は九六八/一五六一年から一二三八/一八二三年までに及ぶ。保存は嚴重に行われているが、それでも年々インクが薄くなる傾向があり、できるだけ早くこの文書にかなする共同研究が実施されることが望ましい。また、東洋文庫は一九九六年〜二〇〇二年にかけて、S.F.ペテルブルグ東洋学研究所と資料保存のための共同事業を実施してきたが、この間にアラビア語・ペルシア語・チャガタイトルコ語の写本についても、それぞれ数万点づつのマイクロフィルムを収集することができた。現在はそれらの文書についての仮目録の作成が完了し、広く研究者の利用に供されている。

お茶の水女子大学教授  
東洋文庫研究員 三浦 徹

講演者が都市史研究を始めたのは、ある先生から手渡された一冊の史料(イブン・トゥールーン『サリーヒーヤ史

における珠玉の首飾り』Ibn Tulūn, *al-Qalā'id al-Jahariyya fi Tarīkh al-Sābihiyya*, 2 vols., Damascus, 1949) がきっかけであった。これをもとに、ダマスクスのサーリヒーヤ街区の形成についての論文を著し、以後十数年にわたってこの街区とつきあうことになるとは予想だにできなかった。いまは、十二世紀から二十世紀までのこの町の通史を書きたいと思っている。

### 一 都市研究の史資料

都市に関係する史資料は、叙述史料、文書史料、非文字資料の三つに分けることができる。第一の叙述史料には、伝記集、年代記、地理書・地誌、都市史（地誌プラス伝記集）、旅行記、百科全書（地誌プラス行政手引き）があげられる。都市史としては、ハティープ・アルバグダーディー（二〇七一年没）の『バグダード史』、イブン・アサーキル（二一七六年没）の『ダマスクス史』、マクリーズイー（一四四二年没）の『エジプト地誌』などが代表的である。ダマスクスについては、イブン・アサーキルの『ダマスクス史』の補遺として、ヌアイミー（一五二一年没）が『マドラサ誌』をまとめたように、情報の蓄積が行われ、このような伝統は二十世紀初頭のバドラーン（一九二七年没）の『遺跡めぐり』まで続いている。

### 二 ダマスクスの地理的環境

ダマスクスは、グータとよばれる緑園に囲まれたオアシス都市であり、地理書や旅行記のなかでは、バラダー川の七本の支流と緑の豊かさが繰り返し強調されている。ウマリー（一三四九年没）の『諸国諸道誌 *Masālik*』は、バラダー川の支流バーナース川について、「バーナース川は城砦に入り、ジャーミー（ウマイヤ・モスク）と城砦〔内〕に行く支流の二つに分かれる。両支流ともに、市内で数イスパーごとに分かれ、周知の権利によって幾つもの分流に分かれる。水は地下のカナート（暗渠水道）を流れて権利者の所へ至り、利用は「さらに」拡大する」と述べる。傍線部のイスパーとは指の節の長さで約三センチにあたるが、これを単位に水が分かれるとはなにを意味しているのだろうか。二十世紀初頭のフランス人研究者の調査によって、主流の水を取水口の幅に応じて自動的に分水するサイフォン式の分水器が発見されており、これと同様の仕組みによる地下水道網が、十四世紀にすでにできあがっていたのだろうか。

### 三 都市の公共施設

都市には、防衛のための城砦・市壁、モスクやマドラサや修道場などの宗教施設、市場（スーク、バーザール）、

隊商宿（キャラヴァンサライ）などの経済施設が建設され、地誌や都市史には、これらの施設の名称、建設者や建設年位置などの情報が記述され、ここから都市の発展の様相を知ることができる。ダマスクスでは、アイユーブ朝（一一六九—一二五〇）時代までに六六〇のモスク、八九のマドラサが建設され、さらにマムルーク朝（一二五〇—一五一一七）にその数が一・五倍に増加し、郊外へと町は発展した。

一三二六年にダマスクスを訪れたイブン・バットウータは、ダマスクスの美点として、ワクフ（宗教的寄進財）をあげ、「ダマスクスには、数え切れないほど多くの種類と数のワクフがあり、その支出は計りしれない。そのなかには、巡礼（ハッジユ）ができない人のためのワクフ、花嫁のワクフ、囚人の釈放のためのワクフ、旅行者のためのワクフ」があると述べる。また、「ダマスクスの住民は、お互いに争うようにモスクやザウィヤやマドラサや墓廟の建設を行う。彼らは、マグリブ人に好意的で、彼らに金や女性や子供の世話をする。このため、ダマスクス近辺のどこで貯えを使い果たそうとも、必ずやなにがしかの生活の手だてを見つけることができる」という。ここでは、ワクフという寄進制度の多面的な役割がよく描かれている。

#### 四 住宅と街区（ハール）

アラブ・イスラム都市の住宅施設は、ジグザグで袋小路の多い細街路網と中庭式住宅を特徴とし、これは高温・乾燥した気候条件やイスラムの女性隔離の慣習に適合している。一九〇四年にシリアを訪れた建築家の伊東忠太（一八六七—一九五四）は、「この地方の家屋はふつう四角なプランであつて中央に中庭をとる。中庭は、大ていは大理石を敷き詰め、その中央に噴水を設けてある。中庭の周囲には部屋が建て回され、前面中央の部分だけが通路になっている。この周囲の部屋は総二階で、二階には家の中から昇るのではなく、外側に石段を作り、内庭から昇る。客は外から中庭に入つてすぐに階上の客間に上がるという仕組みで、すこしも家の中を客に見すかされることはない」（「叙利亞砂漠」、一九〇四年）と、見事にその特徴を描写している。

#### 五 都市のヤクザ

マムルーク朝末期には、ズールとよばれるヤクザ者がわが者顔に町を闊歩した。ヒジュラ暦九〇一年（一四九六—一四九七）にはつぎのような奇妙な事件が報じられている。

「この年、総督の死後、法学者のある者がズールに対し、圧政者（ズルムを行う者）の手先を殺すことは許されると

言つて彼らを唆した。心にひとつのことしかない人間は、直接手先を殺害するか彼ら(ズール)を誘いディルハム銀貨を与え、(ズールは)手先を殺害した。そしてその人物は、(庄政者の)手先であつたと弁明するのであつた。このため多くの災禍が生じ、サーリヒーヤ街区では約三〇人市内では約一〇〇人が殺された。」(イブン・トゥールーン『当代の出来事 *Muqatahat*』)。この記事を初めて読んだときは、ズールとはなにか、誤読ではないかと眼を疑つた。しかし、年代記などで有力官僚のズール(不正)が頻々と語られる時代に、不正から身を守るためには、ズールのようなヤクザ者に頼らざるをえないような情況が生まれていたことを示している。日本史や中国史に登場する任侠やヤクザと重ねあわせると、よく理解できる。

## 六 都市とワクフの荒廢

ワクフや宗教施設は決して永久不滅ではなく、十六世紀にはすでに、「サーリヒーヤの街は、サーウィヤ(修道場)や墓やマドラサで一杯で、「施設の」吏員やナーズイル(管財人)たちがこれらを握っている。彼らはその財産を剥ぎ取り、いまや遺構以外なにも残されていない。……壁を壊し門を売り払い、犬どものねぐらとしてしまった」(パドラー『散步道 *Nuzhat al-anam*』、十六世紀初頭)と

述べられている。二十世紀初頭のパドラーンの地誌によれば、マムルーク朝時代までに建設された一五二のマドラサのうち、当時まで存続したのは二割以下で、その荒廢の原因は、管財人やウラマーによるワクフの私物化にあると指摘している。

第四七七回 一〇月二一日(火)

## ペルシア——征服者と町の顔役——

東京外国語大学教授 八尾 師 誠  
東洋文庫研究員

世界中、どこの街でも見かけるように、イラン社会にも「顔役」はいる。現在もいるが、歴史的にも存在した。しかし、イラン社会に生きる彼らの社会的存在形態やその役割は、イラン社会の歴史的展開とともに、また、イラン社会そのものの構造的変化とともに、大きく変貌してきた。彼らに対する呼称も、時代とともに変化してきたが、史料上、その姿が比較的よく分かるようになるガージャール朝期(一九世紀から二〇世紀初頭にかけて)にはルーティールという呼称が一般的であつた。ルーティールの語源を、創世記に登場するロトに求め、それゆえ、男色の意味合いを指摘する説もあるが、疑わしい。やはり、アラビア語では、

「裸の」とか「飾り気のない」、あるいは「不毛の」といった意味合いを有し、ペルシア語では「日々の糧」、「なんらかの食物」といった含意の「ルート」に由来すると考えられる。つまり、ルーティイとは「他者にルートを提供する者」、転じて「奉仕者」、あるいは「気前の良い者」と解する説が妥当であろう。

ガージャール朝期にイランを訪れたヨーロッパ人が書き記した旅行記に登場するルーティイは押しなべて、反社会的存在、少なくとも社会にとつては好ましくない存在として言及されている。曰く、乱暴者、喧嘩好き、人殺し、ごろつき、ならず者、悪漢、兇漢、無法者、怠け者、人間のくず、気取った犯罪者など等。

ところで、現代のイラン人の間では、単なる「ならず者」、「ごろつき」あるいは「ヤクザ」と「任侠の徒」、義侠の徒との区分はかなりはつきりと意識されていると思われる。つまり、前者を指すラートと、後者を意味するルーティイとは全く別の存在という認識がある。後者は、歴史上、典型的な任侠、義侠の徒として登場するアイヤールの流れを汲み、ペルシア語でいうところのジャヴァーンマルデーイ（若い「ジャヴァーン」＋男「マルド」＋らしさ「イー」の意）の実践者として位置づけられているのである。ガージャール朝期のテヘランを記したある史料によれば、自ら

汗水たらして糧を得ること、目上の者に対する敬意を態度で示すこと、目下の者に対する愛情と思いやりを持つこと、弱者への庇護、困窮者・貧者への手助け、仲間・小路・街区・町・地域・国家への愛着を備えていること、献身的精神・一本気・胆力を備えていること、モノに拘泥しないこと、不正・理不尽な振る舞いに背を向けないこと、などがルーティイたること（ルーティイギヤリー）の要件であった。

イラン社会にあつて、ルーティイが目立つた社会的存在として確認される時代のひとつがガージャール朝期である。それはガージャール王朝の権力構造や当時のイラン社会のあり方と深く関わっていた。「王の中の王」を称するガージャール朝の歴代君主は、形式上は絶対的専制君主として君臨したが、強力な常備軍と整備された官僚機構をもたない王朝権力は、王都テヘランを除けば、実際には、地方諸勢力の微妙な勢力均衡に依拠した、名目的支配者にすぎなかつたと考えられる。つまり、中央から各地に派遣される地方総督や知事は、当地の有力者たち（主として遊牧諸部族長）との妥協的共存を図る以外に職務の遂行は困難であつた。また、自力で統治する力量を欠いた王朝権力は、地方の権力者たちを互いに争わせることで、権力の微妙な均衡状態を維持し、政治的安定を図ろうとしたのであつた。こ

うした。中央地方、關係は版図内に点在する都市社会レヴェルにまで貫徹していた。通常、複数の街区(マハツレ、クイ)から構成されていた当時の都市は、地方総督や知事の下で任務の遂行に当たるキャラントル(世襲が原則)により統治された。都市統治の全権を掌握していたキャラントルは、王自身により地元の有力者の中から任命されるのを常としたが、その際にも地元社会の意向を無視することは出来なかつた。また、キャラントルの下で街区管理の責任を負つたキヤドホダーは、一種の名譽職ではあつたが、キャラントルにより当該街区の有力者から任用され、街区内の諸事万端を司り、世襲を原則とした。

支配権力からすれば、都市支配・都市行政の基本単位であり、同時に、住民からすれば一種の生活共同体としての意味合いも持つていた都市街区は、職能別に形成される場合が多かつたが、時に、宗教・宗派別に形成されることもあり、租税の徴収と街区の治安と秩序の維持に責任を負うキヤドホダーの下、一種の自治共同体的性格を有していた。このような街区のあり方は、街区住民の内的結束を強め、所属街区への帰属意識を高める反面、街区相互で絶えず張り合い、それがより激しい軋轢・抗争へと発展する場合も恒常的に見られた。こうした局面こそが、ルーティーが自らの存在を誇示する格好の舞台でもあつた。

二〇世紀の初頭、立憲革命の展開の過程で、シャー(王)のクデータに抗して、立憲制護持を掲げて立ち上がったタブリーズ住民の蜂起は、タブリーズの街を立憲派と王党派に二分することとなつた。シェイヒー派が有力な街区が立憲派にまわると、それと宗派対立を続けてきたモタシャツレ派に属する街区は王党派に組するといつた具合であつた。タブリーズにおける街区相互の対立・確執は、宗派抗争のみに起因するものではないにしても、タブリーズ蜂起の過程では、それぞれ立憲派と王党派に分かれて、市街戦を繰り広げる結果となつた。シェイヒー派が有力な街区アミール・ヒーズ地区のキヤドホダーであつたサツタール・ハーンは、立憲派戦闘部隊(モジャヤーヘダーン)の実質的指導者として活躍し(後に「国民將軍」という尊称を与えられた)だが、彼はアミール・ヒーズ地区の名だたるルーティーである。彼の盟友であるバークル・ハーン(ヒヤーパーン地区)やナーエブ・モハンマド(アフラーブ地区)などもやはりルーティーであつた。蜂起関係史料は、サツタール・ハーンの人となり、勇氣・意志力・戦闘術に長け、約束を守り、恩義に厚く寛大で、公平にして高潔、信仰心に厚い人物と記している。これは正に、前述のルーティーギヤリーそのものである。

かくして、ルーティーという存在は、都市街区との緊密

な関係を抜きにしては語れないことを提示したが、そのような存在として彼らがイラン社会の表舞台から後景へと退いてゆく過程も、やはり、都市街区そのものの変容と関わっていた。レザー・シャー期（一九二一―四二年）にさまざまな速度で進行したイランにおける都市社会そのものの変質である。外界と隔絶した空間を作り出し、共同体的空間を提供していた街区そのものの構造が、従来の都市形態とは全く無関係に建設された大通り（ヒヤーバーン）やロータリー（メイダーン）によつて物理的に寸断され、破壊されていった。と同時に街区の人間関係も否応なく変質させられていった。こうしたことが、とりもなおさず、ルーティーと街区との紐帯を断ち切り、彼らの存在理由を希薄化させることにも繋がつたと考えられる。こうして、いわば地域社会から切り離され、浮き草化したルーティーには、もはや、権力者の気まぐれのままに、単なる使い捨ての凶器として、弄ばれる以外に道は残されていなかったのである。

一九七九年に勃発したイスラーム革命の最中、シャーが画策した反革命テモや暴動の先頭に立つたルーティー、シャバーン・ジャアファリーは正にその典型であった。

京都大学教授  
東洋文庫研究員  
杉山 正明

「ベルシアの征服者」という課題のもとに、十三―十四世紀のモンゴルによるイランを中心とする東方イスラーム圏の支配に関連して、四つの点に絞つて述べた。第一は、モンゴル時代と呼ばれるこの時期、ユーラシアはどのような状態か、その全体像と時代状況の一端を伝えるものとして、『混一疆歴代国都之図』をとりあげた。現在、龍谷大学図書館と島原市・本光寺に二種の現物が伝わる。これは、十四世紀の中華地域において、あくまで民間用の歴史現勢地図として作られた二種の原因のもとに、一四〇二年に朝鮮王朝で合成・増補されたものである。一見してあきらかなように、陸と海のアフロ・ユーラシアが描かれている。ここに示される大地平とそれにかかわる知識・知見は、プトレマイオス以来の伝統をもとに、とくにイスラーム中東において蓄積されてきたものをまずは踏まえている。そのうえに、モンゴルによる超広域支配と、それを中心にユーラシアと北アフリカとを海陸でゆるやかにつみこむ交流圏の出現が投影されている。たとえば、この地図で示されるイスラーム地域についての情報は、モンゴル時代以前のアジア東方では考えられないものである。海に囲まれたア

フリカという西欧中心史観をくつがえす衝撃的なことごとどまらず、ポーダレスなモンゴル時代という画期が人類史に訪れていたことが見てとれる。

第二に、モンゴルの中東進攻を考えると、現今のアメリカを中心とするアフガニスタン作戦とイラク進攻作戦との時をこえた比較を想わざるをえない。とくに、フレグを主将とする一二五六年のイスマール教団の無血攻略、そして一二五八年のバグダード無血開城は、逆にアメリカの単純な武断主義をきわだたせる。イスラーム中東地域に、外側からあるまとまった「帝国」的なパワーが到来するという事態は、十三世紀のモンゴル、十九世紀の西欧列強、そしてアメリカ主導の現在だろう。中東において歴史上の「モンゴル襲来」と西欧列強の支配とを、ダブル・イメージでとらえる考え方がなされたのは、ゆえなしとしない。

第三に、モンゴルのイラン方面支配を分析するさい、フレグ・ウルスも含めてモンゴル全体がゆるやかな「世界連邦」状態にあったことを見逃してはならないと考える。これまで、やや「モンゴルの分裂」と決めつけてきた感が否めない。それに関連して、第四に「イル・カン国」「イル・ハーン朝」という考え方、いい方がある。モンゴル語「イル・カン」という表現は「部衆の主」くらいの意味で、フレグ・ウルス初代のフレグから、その子アバカ、その子

アルゲンあたりまで一時期に使われた一種の通称で、国家・政権としての名ではない。それを西欧史家が誤解して、王朝・国家の名とした。その誤解の源流は、アベル・レミュザあたりからではないか。

第四七八回 一〇月二八日(火)

トルコ——イスタンブルの町づくり——

明治大学教授 永田雄三  
東洋文庫研究員

現在東洋文庫の所蔵する現代トルコ語(約二万点)、オスマン・トルコ語(約一五〇〇点)およびマイクロファイルの形で収集された写本(オスマン朝史に関係する年代記、論説、伝記集、法令集など一七点)について解説したのち、トルコ語文献収集の重要性についてふれた。それは、一六世紀から一九世紀末にかけて今日の中東諸国(イランを除く)、北アフリカ、そしてバルカン諸国はオスマン朝の支配下に置かれていたが、この国家の公用語がオスマン・トルコ語であったからである。つまり、これらの地域の近世から近代にかけての時代を研究するためには、それぞれの

地域の言語のみではなく、オスマン・トルコ語によって記録された文書史料および文献を利用することが不可欠だからである。そこで、東洋文庫が所蔵するわけではないが、現在、これらの文献・史料を最も多く保存しているトルコ共和国の図書館および古文書館について簡単にふれた。

近代以前のイスラム都市の成立と発展にはワクフと呼ばれる一種の宗教的寄進制度が大きな役割を果たしている。この制度は、オスマン朝のスルタンをはじめとして、高級官僚・軍人、富裕な商人などによって、まずモスクなどの宗教・公共施設（ワクフ施設）が私財を投じて建設され、さらに、これらの私有財産である土地、住宅、店舗、隊商宿、公共浴場などから得られる収益（賃貸料）がこれらワクフ施設の維持・運営のために寄進されることによって実現する。こうした寄進行為は「ワクフ文書」として現存している。

ワクフ文書には、その多くが寄進の動機（現世的・来世的）、建造された施設、その維持・運営のために寄進された物件が、それらの所在場所とともに具体的に記録されている。そのため、ワクフ文書はイスラム都市史研究に欠くことの出来ない史料となっている。ワクフ文書は、これに続いてさらに、寄進された物件から得られる収入の用途（たとえばモスクの維持・運営に要する費用）などが記さ

れている。

このように見てくると、この制度はあたかも完全に慈善行為から成り立っているように見える。しかし、じつはそれだけではない。この制度が普及した背景には、資産家たちが自らの財産を子孫に残そうとする意図がある。それは支配者による財産没収を回避する一つの方法であったこと、イスラム法にもとづく均分相続によって資産が限りなく分散することを防ぐことなどの現世的な目的である。理論上、寄進行為の目的は、慈善行為だけを目的とするもの（「慈善ワクフ」と資産の保持を目的とするもの（家族ワクフ））とに類別されるが、実際には両者の中間形態のものが一般的である。

ワクフ行為として建設された宗教・公共施設（ワクフ施設）とそれらの維持・運営のために寄進された物件（ワクフ物件）は、併せて一つの公共企業体をなしている。これを永続させるためには、これらの施設および物件群の管理人（ムタワツリー）の任命が必要である。ワクフ文書によれば、さきに述べた「中間形態」の場合、この管理人は、最初は寄進者（ワーキフ）自身、かれの没後はその息子、さらに息子の息子、すなわち子々孫々管理人を務めるケースが多い。筆者が調査したトルコのカラオスマンオウル家に属する八人の人物によって起草された一七点のワクフ文

書によると、ワクフ物件から得られる収入の支出については明確に記されているのに対して、物件から得られる収入はいっさい記録されていない。したがって、ワクフ文書の記載だけでは寄進された物件から得られる収入のすべてがワクフ施設の維持・運営のために支出されているか否かは不明である。ここに寄進行為が同時に財産の保全につながる秘密が隠されているのである。しかし、寄進者が残した遺産目録を併用することによってその割合を推測することが可能である。そしてそれはおよそ一〇%程度である。カラオスマンオウル家はモスク(一四)、マドラサ(一一)、ハディース学校(一)、スビヤーン学校(一)、図書館(二)、引水路(二四)、給水泉(四三)、道路(一一)、橋(五)、合計一一四のワクフ施設を約七〇年(一七四七—一八一六)の間にイズミル、マニサなど地域の中心都市や周辺都市、さらには農村部に建設し、ユダヤ人専用家屋、ギリシア人専用家屋、ヨーロッパ人専用家屋、隊商宿、各種店舗、果樹園など合計八一六点にのぼるワクフ物件を寄進している。これらの数値は、ワクフ制度が地方名士にとって強固な社会的基盤となっていることを如実に示している。

イスラム世界の都市建設や都市生活においてワクフ制度が重要な役割を果たしたことはよく知られているところである。本講演では、オスマン帝国の首都イスタンブルを例に、①この町の再建過程にワクフ制度が果たした役割、②一六世紀の都市民の生活とワクフ制度の関わりを二点を、文書や年代記などのオスマン語史料に基づきながら解説することを試みた。

ワクフ制度とはイスラム法による宗教寄進制度をいい、「私財の所有者がその私財から得られる収益の使途を特定し、それ以後の所有権の行使を放棄する法的行為」と定義される。「使途」は、イスラム的な善にかなうものであることが求められるが、実際には多様な現実を内包し、公共性・慈善性をもった使途の実現は、遠い将来に先送りされることもごく一般的にみられた。その意味で、私財をワクフ財として「所有」することは、イスラム法にもとづく特殊な所有の一形態、とみなすこともできる。ただし、ものの「所有」に宗教(神)を介在させることは、所有に対する政治権力の干渉を排除する効果をもった。また、多かれ少なかれ(あるいは遠い将来であれ)、「イスラム的な善」

の実現に貢献することはワクフ寄進成立の要件であったため、寄進者個人々の意思により、総体としては膨大な資本財がワクフ寄進に、そして「イスラム的な善」の実現に振り向けられることになった。イスラム世界におけるワクフ制度は、イスラム社会を他と区別する特色の源泉ともいえず、大きな重要性をもっている。

さて、ビザンツ帝国の首都からオスマン帝国の首都へと変容を上げた一五世紀後半のイスタンブルにおいても、ワクフ制度は重要な役割を演じた。なによりも、時のスルタン・メフメト二世は、ワクフ制度の枠組みを利用して(一)町の復興、(二)イスラムによる支配の視覚化、(三)スルタン権威の視覚化、につとめている。その過程は、メフメト二世のワクフ文書の変遷過程からたどることができる。

当初、ハギア・ソフィア寺院をはじめとするビザンツ時代の教会をモスクやマドラサにかえたスルタンは、それらの財源とするために市場やキャラバンサライを建設し寄進した。これらは都市の復興の第一歩となった。さらにファアティフ施設群とよばれる大規模施設を建設し、町の宗教的・文化的の中核とした。

こうした整備がすすむにつれメフメト二世のワクフ文書は適宜再編纂されている。それらの詳細な比較検討は、町の再建過程を再現する可能性を持っている。さらにこうし

た文書には、政治的な権力闘争が影を落としている場合もある。たとえば、メフメト二世の死後に再度編纂された集大成的なワクフ文書には、一部の財源が書き込まれていない。イスタンブルの家屋に対する地代やイスタンブルの非イスラム教徒が払う人頭税は、メフメト二世のワクフ財源の一部をなしていたが、これらは「私財のみがワクフ寄進の対象となりえる」とするイスラム法に反する面をもっており、さらに、メフメト二世のすすめる中央集権化を快く思わないトルコ系の騎士層やデルヴィーシユ集団の反感をかっていた。このため、メフメト二世の死後に編纂されたワクフ文書からは、これらの財源は意識的に省略されている。文書が真実だけを伝えているとは限らない点には注意が必要であろう。

以上のような史料上の問題があるにせよ、スルタンの大規模ワクフ寄進が町のシルエットを決める重要性をもっていったことは疑いない。配下の家臣たちは、決してスルタンのモスクに匹敵する規模のモスクをつくることはなかったし、イスタンブルの七つの丘はオスマン王家の人々の名を冠するモスクのために確保されていた。スルタンのワクフ寄進は、オスマン朝の権威発揚の機会でもあったのである。

一方、町の市民たちは、また、その財力に応じてワクフ寄進をおこなっている。イスタンブルのイエニベッザーズ

街区を例にとつてみるならば、その街区で一五四六年に機能していた二九のワクフ寄進の多くは、その善行の対象として街区の中心となるモスクを選んでおり、寄進の規模に応じてモスクの維持費を分担していた。モスクは、その街区に住みすでに故人となつた人々が、自らの魂の安らぎのために依頼したコーラン詠唱の声に包まれていた。コーラン詠唱は、永続する慈善の代表である。また、街区の水場に水を運ぶ費用なども個人のワクフ寄進により負担された。こうした小規模なワクフ寄進では、寄進者が子孫のために経済的利益を確保している割合も大きい。そうした柔軟さがまた、ワクフ寄進普及の原動力でもあった。

ワクフ制度の機能は多岐にわたり、イスタンブルの例からだけでは語りつくされうるものではない。しかし、オスマン朝のスルタンのお膝元イスタンブルに関しては、首都ゆえの重要さから、歴史史料が比較的豊富に残されている。オスマン史料から再現されるイスタンブルの都市建設・都市生活像は、イスラム世界に独特な、豊かな相互扶助機能を備えた都市の典型的な例である。